



ウッドデザインの進化を訪ねて Hako 2019年受賞 特別賞 (木のおもてなし賞)



受賞作品のHakoは、天竜ヒノキを使ったマルチボックスで、フランス人デザイン集団「アトリエたくみ」とのコラボレーションから生まれた。ステーションナリーからアクセサリー、化粧品入れなど様々な用途に対応でき、個々のサイズはモジュール化されており、重ねても並べても美しく収まる洗練されたデザインが特徴である。開発した豊岡クラフトの代表取締役社長、山崎徹さんに話を聞いた。

——Hakoの開発のきっかけは何だったのでしょうか

関東経済産業局が実施したパリのテスト販売事業で、セレクトショップで高い評価をいただくことができた。その時に、海外展開を本気で考えるのなら、やはり現地のニーズに合ったデザイン、サイズ使い勝手を考えなければいけないと知りました。ならば海外のデザイナーと組んで開発しようということになり、シヨップの社長からデザイナーを紹介いただいたのがきっかけです。

——Hakoのデザインの特徴はどこでしょうか

例えば、この留め具(ヤトイ)の位置ですね。日本だと機能面を考慮して口が開かないように上につけるのですが、あえて中央に持つところころは完全にデザインですね。最初にデザインを見たときはちよつと作るのが大変だな、針葉樹なので薄すぎると大丈夫かなと心配していました



フランス人デザイナーと開発したHako

——日本の木を使った製品は海外ではどう受け止められていますか

例えば、ヒノキのような木は向こうでは存在しません。英語で説明する時には仕方なく、ジャパニーズサイプレス、と表現しますが、本当は違うかなと思います。弊社の商品のヘビークリーアには、ヒノキブルーとかヒノキリアという名前でも売りに出していますので、ヒノキという日本語のままでも通用するのでしょうか。ヒノキ以外の国産材もたくさんありますが、日本にしかない木はやはり日本の名前でも表現すべきだと思います。

——海外販売の際に言われたアドバースで記憶に残っているものはありますか

カタログ等で着物を着た日本人のモデルを使ったりするけれど、海外で着物を着る機会はありません。海外でそれだと利用シーンが想定できない。利用シーンを具体的に想像できるようなプロモーションが重要というアドバイスでした。弊社の商品は文具のカテゴリなので、その国で筆記具をどう使うか、どんなデザインや色合い

を好むか、海外の店舗でリサーチしてきました。アメリカとフランスとイギリスでは全く異なりますね。

——万年筆ケースはヒット商品かどうかです

実はアメリカは万年筆市場がとても大きくて、ペンショーという一般の方が買ってくる展示即売会が各地で行われています。国内はもちろん、ヨーロッパ製や手作りのものなどあり熱気がものすごい。日本で何十万円もする製品がその場でほとんど売れていきます。2か月に1回くらいの頻度で、アメリカのどこかで開催されます。その中でサンフランシスコとワシントンDCのペンショーが比較的規模が大きく、そこに出席できることになりました。スーツケースいっばいになって、さらに1箱ぐらい送って販売してみたいところ、展示会は3日間あったのですが半日で完売してしまいました。

——御社の製品がアメリカの市場にうまくはまったということですね

買いに来られる方は商品の細かい



研削によって面の滑らかさを出す、熟練の技で醸し出される美だ



手作業の良さが改めて海外でも評価されているという

くりまで見る、目の肥えた方が多い。印象的だったのが、自分の買ったペンと合わせてSNSにアップしてくださったこと。それを見た人が、一体どんな会社なんだと弊社のことを検索してくれたようです。それは本当に大きかったですね。その後、コロナ禍となりましたが、SNSのDMやメッセージを通じて、どうやって買えるのか、という話がたくさん来るようになりました。

——価格とブランドの考え方で日本と海外に違いに驚かれたそうですが

ウォッチボックスにはヒノキを使っていますが、茶色の4個用が最初1万4000円ぐらいで販売していました。当時、韓国の時計店さんがすごく気に入ってくれて、取り扱いは始まったのですが、そこがロレックスなどの高級ブランドを扱っている、韓国でも一番の売り上げを誇る個人店だったのです。

2019年には韓国内で個人用のものが月に100個ぐらい売れていました。当時価格が安かったのですが、その方が100万、200万もする時計を入れる箱が1万4000円では釣り合わない、作りがすごくいいし、お客さんのことを考えると、もっと高

が、デザインがあがってからの、試作を繰り返して完成しました。

——日本のものづくりや技術の海外での評価はいかがですか

海外では手作りが少なくなっていて、日本の手作業の製品はとも喜ばれているようです。ヨーロッパもアメリカも手作業ものはほとんど個人がやっているの、工業製品ではなくDIYの高級版のような感じですが、日本では個人でやっているも昔からの技術が繋がっているの、工芸品と量産品の中間のようなカテゴリになっています。実は万年筆好きの人たちは意外にIT業界、Googleのシステム開発者のような層の人が多いいです。ITで裕福になっても、やはりアナログな世界が好きという人は多いですね。デジタル隆盛の時代だからこそ、手作業や技の世界に憧れる、木材も有機的な素材として注目されているようです。漆はアメリカ、ヨーロッパでも天然素材としてとても人気があります。

——ウツデザイン賞を受賞してよかったこと、感想をいただけますか

外観のデザインだけではなく、作り方や技術も含めて評価いただけたことは私たちからするととても大きくて、自信になりました。もう一つは海外に売っていく場合にも、日本でデザイン賞を受賞したという実績は大きいですね。販売の際にも、それをアピールすることで、交渉もやりやすくなります。社内的にも、賞をとれるような会社に勤めているということ、従業員のモチベーションも高まっています。自分の家族に、ここが自分の会社なんだ、これは自分が作った作品なんだと言えることが何より大きいと思います。



高級ブランドの時計を引き立てる、洗練されたつくり



豊岡クラフト代表取締役社長 山崎徹さん